第三章　日清戦争時代

日清戦争は我が國の文物に一新紀元を劃するに至つたが、就中海運に於て其の最も著しきものがあつた。

開戦と同時に軍事輸送のため一般商船の多くは御用船として徴傭せられ、其の最大徴傭量は陸海軍合せて約二十三万屯（内陸軍十三万八千二百五十七屯（汽船　百十二隻、十三万四千屯、帆船　七隻、四千三百屯））に達した。勿論我が國保有量丈けでは不足であるから外國船を借り入れたり購入したりして補塡した。使用船舶の大きさは平均一隻約千二百屯、帆船約六百屯であつた。当時の商船が如何に小型であつたかを知ることが出来よう。

如斯状態であつたから其の欠陥を補うがため戦争中又は戦後數多の船舶が新造又は輸入せられた結果我が國の船腹は一時に膨脹し、明治二十九年末には八百九十九隻、三十七万三千六百屯（五屯以上）と戦前の三倍に急増した。此等の船舶は戦勝の勢いに乗じて俄かに其の活

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

動範囲を拡大し、日本郵船は此年欧米濠の三大航路を開き、新設の東洋汽船会社も亦三十一年桑港航路を営み、揚子江には大阪商船及大連汽船が進出し、台湾に対しては大阪商船が航路を開始するの盛況を呈した。

当時我が国の造船業は極めて幼稚で、保有船舶の大部分は海外より輸入し、其の大分は間に合せの老朽船であつたから、政府は漸く其の改善の必要を感じ明治二十九年新たに造船奨励法と航海奨励法を制定するに至つた。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp